

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第九十五卷「芸術、文化、言語、文学（三の五）」

日本文学、諸言語文学（五）

評論、エッセイ、随筆（文学の評論）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第九十五巻を成し、岩崎の言語の著作のうち、文学や文学者に関する評論、エッセイ、随筆を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

宮沢賢治

第三編 三十歳～三十九歳

日本の新しい時代と社会における「宮沢賢治感覚」の探究について

清水正先生大勤労感謝祭記念カタログ（曼陀羅特別号）

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

宮沢賢治

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作（色々ありすぎて、あえてこれを）

『農民芸術概論綱要』

宮沢賢治こそ、我々共感覚者、そして何より大自然と子どもたちの最大の味方ではなからうか。彼は、松尾芭蕉と並んで、生理学的定義の「共感覚」の研究者からも取り上げられる、数少ない日本人共感覚者の一人である。

しかし、「宮沢賢治にも、文字に色が見えていたのではないか」などという問いは、本当はあまり重要ではないのかもしれない。どちらかと言うと、そのような問いは稚拙でありうるかもしれない。

私の場合、自分の共感覚についての仏教分野からの探究としては、禅ないし中観・唯識の方面に進んだのであるが、賢治の場合、法華経と国柱会であった。簡単に浄土に進まない点は私と同じであって、浄土はあくまで「地上のどこかにある。なければ自分で作る」ものであった。それが岩手「イーハトーブ」や「羅須地人協会」であった。

私がウェブサイト上で色々な共感覚者や解離性障害者を集めて、

少々閉鎖的な、現在のところ自分たちだけに通じ合える言語まで造り上げてしまった試みは、賢治の人生にも似ているのだと思えて、安心する。

第三編 三十歳〜三十九歳

日本の新しい時代と社会における「宮沢賢治感覚」の探究について

二〇一六年十一月八日 起筆

二〇一六年十一月二十六日 攔筆

二〇一七年三月一日 刊行

学術誌

外部刊行者が刊行済み。閲覧希望者は次の書籍を見よ。または、個別に岩崎まで問い合わせよ。

『清水正・宮沢賢治論全集 第二巻』D文学研究会、二〇一七有料

著作者が出版者に権利の一部を譲渡

著作者及び著作権者への問い合わせが必要

清水正先生大勤労感謝祭記念カタログ（曼陀羅特別号）

閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。